

令和5年度
白根北児童館年次報告書

I 令和5年度の運営総括及び来期の課題

総括

昨年の令和4年度はwithコロナにより、休館にはなりませんでしたが。それにより、来館者は定期的に利用でき、少しずつではありますが、来館者数が増えてきました。更に今年度はコロナウイルスも5類に移行したことで館内の人数制限や滞在時間の制限をなくし、イベントの人数制限を緩和、また移動児童館、南区4館合同企画等大きなイベントも行われたこともあり、劇的に来館者数が増加しました。学校や保育園の感染状況によっては、利用者に波がある状況でした。

①来館時の決まり・受付方法、館内の環境整備の変更

マスク着用の徹底も無くなり、個人の自由になりました。しかし、感染症対策として、来館したらず予防効果の高い「石鹸での手洗い」を徹底しました。

受付方法はコロナ禍と変わらず、日ごとの来館者の情報把握を目的として南区役所健康福祉課から頂いた入館者表のデータをもとに来館者受付表を作成し、氏名、住所、電話番号、園学校名、来退館時間を記入してもらいました。小学生は住所、電話番号を記入するのが難しいので学校名を記入してもらいました。変更したことで大通小学校の児童は自分の学校名「おどおり」の字を学び、書き順を覚えることができ、中高生は自分の住所、保護者の電話番号を覚えることができとても良かったと思います。

また、環境整備として各部屋常時3か所以上の窓、ドアを開け換気しました。幼児の部屋に「遊んだものいれ」の籠を設置し、遊んだおもちゃは籠に入れてもらいました。籠に入れられたおもちゃは職員が随時回収し、消毒してから元の場所へ戻しました。加えて各部屋利用者が居ない時に午前と午後に1回ずつ設置されている全ての遊具を消毒し換気しました。遊戯室では交代の時毎に遊具の消毒、換気時間を5分設けました。遊戯室の利用前後の手洗いを緩和したもの、不特定多数の遊具の共有から遊戯室終了後に手洗いを促しました。冷水器も共有を避けコップを持参するか紙コップを提供して水分補給をしてもらいました。SDGsの観点から子ども達には水筒を持ってくるように呼びかけました。

②SDGs チャレンジ

昨年度同様に来館時の手洗い等を促していることから、毎回ハンカチを持ってくるように声掛けしました。「ハンカチを忘れたら取りに帰る」と職員と約束する事でハンカチ持参率が高く、中高生もハンカチを持って来るようになりました。出かける時のエチケットとして身につけてきたと思います。またハンカチを忘れたことを隠さずに職員に伝えることで困った時に大人に声を掛ける習慣が身につけて欲しいと思います。

1. 乳幼児事業

(1) 総括

平日の昼間は0歳から3歳までの乳幼児と母親の利用がほとんどでしたが、父親の育休も増え、平日の父子利用も珍しくなくなっています。利用時間は午前中がほとんどでしたが、お昼寝明けの午後利用も定着し、冬季は来館者がいない時間がほぼありませんでした。

また、保育園帰りに児童館へ立ち寄り、夕食まで思いっきり身体を動かして過ごす親子も見受けられました。休日には、家族で過ごしたり、近所のグループで集まったり同世代の子どもとの交流

を目的に来館する親子も見受けられました。

① いちごタイム（作って遊ぼう・農園の活動）

毎週火曜日の10時30分から概ね20分程度、乳幼児の定例イベントとして、『いちごタイム』を開催しました。『いちごタイム』は主に入園前の乳幼児親子対象としていますが、夏休みや春休み中は保育園児や幼稚園児の参加もありました。内容は主に手遊び、親子触れ合い遊び、絵本読み聞かせ、季節にちなんだ遊びを提供してきました。参加組数は平均8～12組で、月齢は2・3歳児が多かったです。近隣の支援センターでも「火曜日は児童館の『いちごタイムの日』と伝えて下さっている事もあり、『いちごタイム』は定着しています。

また、第1火曜日には『いちごいちば』を取り入れ、いちごタイム終了後に古着やおもちゃを持ちより、欲しい方がもらっていくサイズアウト交換会を行いました。第3火曜日には『誕生日会』を取り入れました。『誕生日会』では、大きなケーキパネルの装飾をし、誕生月のお友達を皆で一緒にお祝いしました。

その他、農園の活動では畑の水やりや夏野菜の収穫など土と親しむ機会を設け、収穫時にはお土産として持ち帰ってもらいました。

② いちごみるくタイム

ママのリフレッシュする場として『いちごみるくタイム』を昨年度に引き続き設立しました。

『いちごみるくタイム』はママ同士が児童館ならではの【遊び】のカードゲームやバドミントン・卓球等を通してコミュニケーションを取りやすくし、その後のママ同士の繋がりを深めるために始めた事業です。0歳のねんね赤ちゃんから1歳のよちよち赤ちゃんを持つ母親を対象に企画しましたが、2・3歳児の母親も「参加したい」と言う声を聞き、その後どなたでも参加できるようにすると、毎回4～6名が集まり、2・3種類のゲームで盛り上がっています。ゲームは得意不得意が分かり、見た目と違う姿が見られ、母親達の打ち解ける速さが違うと感じています。また母親同士で認めあう姿が見られ、母親の自己肯定感の向上にも繋がっていると感じられます。中には「ルービックキューブを全面クリアしたい」と母親がその後解説し揃えられるようになると「すごい!」「天才!」と他の母親から声上がり「児童館に来ると私も自己肯定感が高くなる」と喜んでいました。平日の午前中の利用者が増え、毎日4～6組の利用が定着しています。

昨年度課題に挙げた「BP講座開催後の交流の場に児童館の選択肢が無い」ということから、いちごみるくタイムを午後に「赤ちゃん集まれ」と称し「赤ちゃんの時間」を設けBP開催後の利用促進に努めました。当時6か月程の赤ちゃんを連れて集まった母親等も成長に合わせていちごタイムに参加してくれました。また午後の利用も増えました。

③ パパサロン

子育てオーエンジャー☆みなみと共催で行った『パパサロン』は南区で初めてのパパ向けの連続企画です。近年パパの利用も多く、パパの育児参加が多く感じられていますが、イベントへの参加はママが多いことからパパの参加は控えめでした。コロナ禍で飲み会、付き合い等が減っている今、パパ同士も関わり繋がる事で育児ストレスを解消してほしいと始めた企画です。同学年を持つパパが関われるようにと、ベビーマッサージ、自己肯定感を育むお話、足育、運動遊び、運動会、リトミックと回を重ねる事で繋がりが出きるように企画しました。

今は夫婦で子育てを共有している家族が多く、パパが1歩踏み出すことを目的にママの参加も

OK にすると急激に参加希望者が増えました。「パパが家では何もしないから他の人を見習ってほしい」「初めは参加するしないで喧嘩した。それでも来てくれて毎回通っている」「何もしないと思っていたけど意外に出来ていた」等、お互いの考え方が変わる姿も見られました。また、「運動遊びでは」参加者の中でキッズ向けの資格を取ったパパが「自分も提供できないか？」とパパサロンの講師として名乗り出て下さり、地域のパパが提供するパパサロンが実現しました。運動の基礎づくりや体幹を育む遊びを紹介してもらい、親子で遊んでいました。子育てのちょっとしたコツも話して下さい、話している間に懐にいた自身のお子さんが眠る姿に参加者も癒されました。

④ 季節イベント

定例の乳幼児イベントの他に季節に合ったイベントも実施しました。7月七夕会、10月ハロウィン会、12月クリスマス会、2月豆まき会と、それぞれの季節を感じながら、月齢の低い乳幼児でも無理なく参加できるイベントを実施しました。定員制にすると予約はあつという間に埋まり、定員数を広げ実施しました。内容は例年人気の、職員が寸劇をして母親達にも見て楽しんでもらえる取り組みと「写真スポット」を設け今年は参加者の活動も復活しました。12月のクリスマス会では、大通郵便局局長にサンタクロースになってもらい、子ども達にプレゼントを手渡ししてもらいました。子どもと母親は大喜びでした。2月の豆まき会では鬼は登場せず、職員扮する桃太郎とお豆戦隊ビビンビーンと一緒に風船鬼に豆をまきました。母親等は想像とは違ったイベントの発想に楽しんでもらいました。

⑤年長児交流会

幼稚園・保育園・こども園・小学校の連携を深める意向から、コロナ前に実施していた年長児交流会を復活させました。カデリュスいぶき保育園・大通保育園・興野保育園・きんし幼稚園の園児が参加し、ゲームを通して交流をしました。園児たちは「名前は？」と自分たちで聞き合ったり、ゲーム後では「バイバイまた会おう」と挨拶を自主的に交わしている姿が印象的でした。また休日に家族を連れて再度来館する園児もおり「子どもに連れて行ってと頼まれました」という声も聞かれました。その後、小学校に入学する不安が少しでも解消できればと思います。

(2) 来期の目標・課題

近年、支援センターからの紹介や、口コミ、HP等での来館者が定着してきたと感じます。友達同士で来館したり、紹介してもらっての来館は初来館のハードルが低く、来館時の緊張感が少なく、すぐに職員と打ち明け、会話が弾みます。また、平日、休日関係なく利用者が平均的に来館し顔見知りになると自然と交流している姿が見られました。父親の利用も多く父親同士の交流も増えてきました。また、今年は小学生が積極的に幼児と関わり、保護者から「昨日公園で〇〇ちゃんに会って一緒に遊んでもらいました。」と児童館外でも交流が広がっている話を何度も聞きました。小学生にとっても知っている大人が近くにいることは地域で見守られている安心感があるのではないかと思います。児童館から地域が繋がっていく実感をしました。

コロナ禍で保育園、学校行事が人数制限・時間分散等により、クラスの保護者との交流する場がなかったり、出席する機会がなく、子どもの通う保育園、学校に興味、関心の意識が下がったと感じます。その為、悩み等を一人・夫婦で抱え込んだり、孤立する環境が出来てしまうと思います。来館した際に利用者と関わる事で利用者が打ち明けられる雰囲気を作り、利用者の悩みや

不安に寄り添いながら、乳幼児と保護者の居場所になるように、行って良かったと思える児童館にしていきたいと思います。

2. 小学生事業

(1) 総括

今年度は2・5・6年生の利用が多かったです。1年生のほとんどが学童クラブに在籍し、友達と約束が出来ず、1人で居る不安から来館してもすぐに帰る子が多く1年生の利用が伸び悩みましたが、他学校から来館する1年生は大通小学校の子ども達が遊びに誘って一緒にドッジボールやボードゲームで遊び、それをきっかけに毎週来館する子が多かったです。コロナ前は友達と約束をして利用する子どもが多く、グループで遊ぶ姿が多く見られましたが、今年度は昨年同様少数で来館し、その時居る子ども達で遊ぶ姿が見られ、他学年交流が自然とできました。高学年は低学年への配慮が上手で、低学年は高学年のパワフルな姿に相乗し、楽しく過ごしていました。また夏ごろから中学生との交流も増え、顔見知りの中学生が来ると引っ張りだこでした。また乳幼児との交流もし始め、乳幼児の遊び相手になり優しく関わっていました。常連の子どもたちが増えると、学年や学校が違っても名前を憶え、友達になっていく姿が見られ、知っている子どもが来館すると歓声が上がり玄関で出迎えている姿が印象的でした。ある程度人数が揃うとドッジボール、一輪車、鬼ごっこその時居るメンバーで遊戯室をどのように利用するか話し合い、決めている姿が見られ、やりたいことが出来るようにみんなで考えている姿も印象的でした。

① 地域の方との連携

今年度は地域の方々のご協力を頂き、沢山の活動が出来ました。7月のドッジボール大会では父親たちを募り『と～さんず』を結成し子ども達の対戦相手をして盛り上がりました。こども達はお父さんの投げるボールの速さに歓声を挙げ、お父さんは子ども達のキャッチの上手さに歓声を挙げ、お互いにいい刺激になったと思います。また、母子家庭の保護者から「父親との関わりを補ってもらえ感謝している」と話して下さいました。ドッジボール大会はその後リクエストが多く、9月、3月と実施しました。その他、地域の方が子ども達の学力理解を高めるために『てらこや』を夏休み中に実施。小学6年生女子と中学生が英語の理解に必要な国語を理解するポイントを学習しました。苦手意識の高い文章問題のポイントを教えてもらう事で、導入のハードルが下がり取り組みやすくなったそうです。8月には大通地域生活センターと共催で『クラフト工作』や地域の防災士に『地震防災』の絵本を通して「こんな時どうする？」をクイズ形式で教わりました。「1人で家にいた時」「学校の帰り道」「自転車に乗っている時」等沢山の可能性からどうしたら良いかをみんなで考えました。核家族共働きの現在、子どもが1人で過ごしている時間が多く、緊急時に対応できる心構えは大切だと感じました。訓練や体験がいざという時に活かされるようにまた機会を設けたいと思います。児童館OBやOGの活躍もありました。児童館OGの県立大学生が仲間を募り、幼児から低学年向けにクリスマスコンサートを実施。歌やダンスで盛り上がりました。最後には手品でサンタさんから貰ったクリスマスプレゼントを出し児童館の玩具として使っています。アンケートでも「司会進行をしているきたっこわくわくクラブのメンバーと大学生ががんばっていてとても良かった」「またこうゆうイベントに参加したい」という声が多くありました。2月の恒例豆まき会では怖い赤鬼、青鬼が登場。児童館OBが鬼に扮し幼児を抱っこし保護者は写真に収めたり、小学生を追いかけたりと活躍してくれました。このように地域の方々と共に子ども達が様々な体験の出来る場になっていると思います。

② 移動児童館

今年度から「児童館利用促進事業 GO TO 児童館」に充て根岸小学校地域、大鷲小学校地域に出向きました。根岸地域では、夏休みに週1回計4回根岸地域生活センターで「ねぎしっ子児童館」を実施。小学6年生を中心に毎回6,7名程度集まりました。身体を動かすドッジビーやポッチャ、テーブルカーリング、カプラ等毎回3~4種類の遊びを行いました。初日に子ども達とルールを作り、「次回も来る？」と友達同士で確認をすると「いいじゃん！家に居てもつまらないし。週に1回こんな日があっても楽しいよ！」と皆勤賞の生徒が多かったです。また、中学生が弟に付き添ったり、お手伝いに来てくれたことにより、遊びも楽しくなりました。地域柄学年問わず仲が良く、みんなで楽しんでいる姿が印象的でした。最終日にどの遊びが楽しかった？と聞くと「〇〇、△△…あれ？全部言っていない？」と全部の遊びを楽しんでくれました。また、根岸小学校の振替休日に根岸ひまわりクラブにレクリエーションとカプラを提供しました。レクリエーションでは得点を競う競技で合計得点を職員が計算していると、計算の得意な男子が率先して計算をしてくれたり、片付けを手伝ってくれたり子ども達の行動に感動しました。カプラではあっという間に5000ピースがなくなるほど夢中になり、大作が出来ました。片付けではすべてのカプラを並べ蛇を作り、最後まで楽しんでいました。その後保護者と児童館へ遊びに来てくれました。大鷲地域では、大郷地域センターで昨年に続き大鷲小学校の生徒2~6年生に向けて月に2回、定員各10名で「おりがみDays」を提供しました。昨年参加した子ども達から「この前作ったおりがみどこやったっけ？」という声が多く聞かれ、今年度は壁掛けカレンダーに作品を貼り飾れるようにしました。その月の季節に合わせた折り紙を折り、自由に貼ってもらう事により、おりがみだけでなく絵を描いたり楽しんでいる様子が見られました。大鷲小学校の低学年は大郷地域生活センターで運営している学童クラブに所属している児童が多く、学校帰りにそのまま参加でき、学童クラブに所属していない児童も自分で来所したり、送迎してもらい参加していました。また、大鷲小学校でも昼休みにおりがみの時間を月に2回6か月実施しました。1~3年生は「ギネスに挑戦！世界一良く飛ぶ紙飛行機」を実施し折った紙飛行機を体育館で飛ばしました。それを見ていた4年生から「すごい！4年生は何月に出来ますか？」と質問され、4~6年生には別の折り紙を…と書いていましたが、4年生も同じ折り紙を提供することにしました。5・6年生は「まるで鳥！パタパタ飛ぶ紙飛行機」を実施しました。毎回参加する子どもからは手先の上達、一人で集中して遊ぶ、順番を守る等の変化が見られました。

③ 農園クラブ

設立当初の「子どもたちに土に触れて欲しい」という願いから設立された農園を児童館運営の中心に位置づけ、子どもから子育て世代、多世代間の交流を促し地域の繋がりを深めること、白根北部の各地域の農業体験の格差を埋め郷土愛をはぐくむことを目標に、白根北児童館の農園活動を地域と子どもが関わる拠点活動として農園活動を主とした「小学生クラブ」を立ち上げました。月に1回計6か月間、農園で苗植えから収穫、収穫した野菜の提供を一貫して行います。今年は大鷲小学校・大通小学校・有明台小学校の3地域の小学校から11名の参加者が集まりました。

農園活動には、地域のボランティアグループ「きたもんクラブ」に協力を頂き子どもたちと一緒に活動してもらいました。また農園活動を発展させるために、根岸地域前コミュニティ協

議会会長の紹介で、鷲巻地域の農家から約100坪の畑を貸して頂けることになりました。

農地拡大により手作業ではかなりの労力が必要になります。そこで、ワーカーズコープの機能である、仕事おこしサポート体制「社会連帯」を活用し、耕耘機の購入や農作業道具の補充をしました。

小学生クラブを「きたっこわくわくクラブ」と名付け、じゃがいも・さつまいも・ミニトマト・バジル・ししとう・ピーマン・ゴーヤ・枝豆の他に、地域の方からさつまいもほうれん草等苗を頂き苗植え・草取り・収穫を中心に活動を行いました。野菜を地域の方へ提供する「あおぞら市場」を夏と秋に開催。その際に小学生クラブのメンバーは受付や売り子役、来年度の苗代の募金をきたもんクラブの方々と行いました。夏は10種類153袋の野菜が並びました。また、白根北中学校の総合学習「北の塔」の野菜販売ともコラボが実現しました。

秋はさつまいも61袋、ラディッシュ30袋用意しました。その際、畑を貸して下さった方やきたもんクラブの方への感謝のセレモニーや白根北中学校のよさこい披露、ハロウィンパーティを同時開催しました。

クラブのメンバーはあおぞら市場だけでなく、季節のイベントの司会進行や受付等様々な場面で活躍してくれました。参加したメンバーからは、「楽しかった」「来年もやりたい」という声も聞かれ、全員が次年度に申し込み、来年度は人数が増える予定です。きたもんクラブの皆さんからも、ボランティアメンバーが集う喜びの声を聞かせて頂きました。

また今年度は区民生活課との協力でダンボールコンポストを実施し、家庭で出た野菜くずをたい肥化し、循環しました。

クラブに参加しなかった子どもたちも農園活動に興味を持ち今年も「お手伝いスタンプカード」を作成しました。水やりでスタンプ1個、バケツ一杯の草取りでスタンプ2個、10個貯まると野菜引換券になる仕組みです。お手伝いが見える化したことにより、子どもたちも「大変・めんどくさい」から「楽しい」に変わりました。そしてお手伝いしたことで感謝されることにより喜びを感じることができました。

また子どもたちが、持ち帰った野菜を保護者が料理して沢山の美味しかったという話を聞きました。頂いたレシピをおたよりや、館内に掲示すると来館者からも好評で、現在も掲示中です。

これらの活動を通して野菜の生育を見守る楽しさ、収穫する喜び、野菜を提供し感謝される喜びを体験し、地域の特産である果物や野菜に興味を持ってもらい食育と郷土愛に繋げていきたいと思えます。

④ 4館共同ドッジボール大会

南区の児童館4館でドッジボールが人気だったことから今年度初『南区4館合同ドッジボール大会』を実施しました。各館で低学年(1～3年)、高学年(4～6年)のチームを作り、白根児童センターで対戦しました。この企画を聞いてから子ども達のドッジボールに対する熱意が変わりました。『とーさんず』の結成もあったことから『とーさんず』への闘志を燃やし、子ども達のチーム力が高くなったと思います。夏ごろから6年生が中心となり「チーム名」を考えたり、中学生と作戦を考えたり、日々のドッジボールで作戦を実行したりと高まってきました。

11月の大会では大通小学校でインフルエンザが流行し、学級閉鎖が相次ぎました。参加メンバーの半数はキャンセルとなりましたがその後学級閉鎖にならなかった子ども達が申し込み、当日を迎えることができました。低学年の部は練習もままならなかった中ではありましたが2位になりました。最後のチームに負けての2位だったことから試合終了後、悔し涙を流す子ど

も達がいきました。それを見ていた高学年が「俺たちが敵を討つ！」と宣言。プレッシャーに押しつぶされなかと心配しましたが高学年は見事優勝しました。優勝し貰ったトロフィーと賞状を白根北児童館で留守番をしていた職員に見せたいと、翌日メンバーが児童館に揃い職員に報告してくれました。悔しい思いをした低学年も「よっしゃ！」とガッツポーズをし、職員と共に喜びました。みんなで勝ち取ったトロフィーは児童館に飾ってあります。その後も一緒にドッジボールをしている中学生に見せたり思い出話に花を咲かせています。

インフルエンザで参加出来なかった子ども達も悔しい思いをしました。「お医者さんに行くとインフルエンザと診断がつくから行かない！」と言ったり、「今日熱が下がればあと3日あるから大丈夫だよね！」と熱下がることを願ったりと保護者の方から沢山の声を聞きました。そこで、3月に再度『ドッジボール大会』を白根北児童館で実施しました。他館にも「チーム参加」で声を掛けると、味方児童館から低学年、高学年とチームを作り参加してくれました。白根北児童館では低学年、高学年各3チーム結成。中学生と児童館OB『とーさんず』も参加してくれました。チーム戦と学年対『とーさんず』を行い盛り上がりました。普段あそぶメンバーと違い味方チームが新鮮だったことから「あの子すごい！」「え？味方上手い」「来年ヤバイ！」と子ども達が相手を認め更に闘志を燃やしていました。「楽しかった」「また来てほしい」と参加した子ども達は大満足でした。子ども達の「社会性」「主体性」等「育む力」はすごいと感じる大きなイベントでした。

(2) 来期の課題・目標

コロナ禍の3年は休館や遊びの制限があり、来館しにくさも出ていたのではないかと感じます。子ども達にとって利用しやすい児童館になるには、改めて定着するように働きかけが必要かと感じます。一方、一度来館した子ども達は何度も遊びに来ています。職員との関わりや児童館で遊ぶことが楽しいと感じてくれていると思います。子ども達にとって人との関わりがとても大切な時期であるため、今後も職員の関わりや他学年や学校の異なる子ども同士・乳幼児や中高生・地域の方の交流も大切に繋げて行きたいと思っています。

また、子ども達の声から砂遊びやよさこい披露等実現できた事業もあります。これからも子ども達と一緒に考えていきたいと思っています。

3. 中学生・高校生事業

(1) 総括

中高生の利用時期は暖かい時期が多く、部活動の休みの日や週末にグループ毎で来館していました。昨年定期的に来館していた野球部員は高校生になった事から来館は減りましたが、夏休みや休校日に来館し、職員に高校の様子を話してくれました。毎年恒例で農園の手伝いをお願いすると、必ず手伝ってくれてとても頼もしい限りです。職場体験から来館するようになった根岸地域の中学生もおり、遊戯室でバドミントンや遊戯室でカードゲームやボードゲームを楽しんでいました。中学生は小学生に大人気で夏休みには一緒にドッジボールをしてもらえることから中学生の周りには小学生が付いて回り、一緒に大人数でカードゲームをしていました。ドッジボールには決まった中学生だけでなく、その時居る中学生が自主的に参加していました。中学生も比較的学年問わず、男女問わず仲良く過ごしていました。秋ごろから中学3年生は受

勉強が本格化し「遊びに来れないよ」と職員に話していたにもかかわらず、秋の「あおぞら市場」で「よさこいを披露してほしい」とお願すると5名が参加し、「あおぞら市場」のオープニングを務めてくれました。その後もハロウィンパーティーのお手伝いをお願いすると、そのまま各自ブースに行き、乳幼児と交流し、最後には参加者全員とじゃんけん大会で中学生が乳幼児相手に手加減をしたり、保護者相手に本気になったりと楽しく交流していました。

また日常でも中学生が幼児の遊び相手になってくれています。ある日遊戯室で中学生男子が遊んでいると幼児兄妹が入ってきました。1名の中学生男子が笑わせるつもりで追いかけると「こわい〜！」と逃げられました。それでも気になる両者。中学生が職員に「どうすると遊べるか教えて！」と尋ねてきました。職員と共に加減をしながら時には怖いと言われたキャラクターを演じながら一緒に楽しみました。その場ですぐに次の方法を考える柔軟性に驚かされました。

高校生も定期的に来館し学校のこと、部活動のこと、アルバイトのことなど近況や悩みを話していました。ある日、高校生が来館し中学生と一緒に遊びたいと声を掛けに行きたいものの勉強をしている姿を見て「ダメだ！声かけれない」と職員と話していると高校生が勉強道具を片付け待っていていました。「今がチャンス！」と中学生に職員が付き添い遊びに誘っていました。「〇〇先輩！」と中学生が高校生のTシャツの絵柄からニックネームをつけ呼んでおり、打ち解ける速さに驚かされました。

また3年前、中学3年生の男女10名程が毎日のように来館していたメンバーが高校3年生になり最後と言って何回か来館しました。久しぶりに会う職員に高校生活の思い出や進学先のことを話してくれました。巣立って行く子ども達が社会で活躍することを楽しみにしたいと思います。

イベントではスポーツミッションや小学生のドッジボール大会に『とーさんず』メンバーとして参加してくれたり、ハロウィンウィーク等一緒に楽しんでくれました。今年は4館合同中高生のバスケットボール交流会も行われ、白根北児童館からは高校生が白根児童センターで3オン3を楽しみました。中学生との交流でしたがすぐに打ち解けみんな楽しんでいました。終了後中学3年生に受験のアドバイスをしている姿も見られ校区問わず交流している姿が印象的でした。

今後も、中高生にとって居心地のよい『居場所』となるようにイベントや普段の関わりを大切にしていきたいと思えます。

(2) 来期の課題・目標

中学生・高校生の『居場所』作り

年々中高生の『居場所』としては成果が見られていると思います。今年度引き続き継続していきたいと思えます。

中高生の年代になると、学校の授業や部活動、習い事等でそもそも児童館に足を運ぶこと自体が難しくなります。忙しさに加えて人間関係や進路のことなど悩みが多くなる時期に、児童館が息抜きするための1つの『居場所』になればと考えています。中学生はどの学年も小学生の時から来館していた子ども達で、一時来館しなくなっていた子ども達が再度来館し、成長した姿を職員に気付いてもらい、職員と沢山話をして交流している姿をみると、彼らにとって安心できる職員がいる自分の『居場所』の一つとして感じ取ってもらえているのだと思えます。冬期毎週のように遊びに来る中学生がケガをして保護者に連絡をしました。その後「遊べないから家にいるように言うのですが児童館に行きたいと言うので本人にとって息抜き

の場なのだと思います。無理しないように見守ってもらえますか？職員がいるので私たちも安心です。」と連絡を頂きました。また別の保護者も「繊細な子なので落ち込みやすいのですが児童館には行きたいって言うんです。」と仰った方もおり、中高生の気持ちの拠り所としての重要性を感じます。

また中学生になるとまだ児童館の存在を知らない、知っているけど行ったことない子ども達と一緒に来館し新たな利用者も増えています。

中高生の来館は、小学生時代の関わり、更には乳幼児時代の関わりが反映されると感じました。来館した時には職員が密に関わり、信頼関係を築くと同時に中学校等にポスターを掲示して周知していきたいです。イベントの内容もスポーツ系に加え、職員とのおしゃべりタイムや受験時期の学習応援タイム等を設けてゆっくり話したり、勉強の息抜きをしたりするものを提供できればと思います。日々の忙しさなどからストレスフルな環境で過ごしている中高生の心の拠り所となるように『居場所』作りをしていきたいと考えております。